平成２９年５月の現況と６月の対策（花き）

実況

１　キク

奥越の秋植え夏ギクの草丈は、5 月 15 日(昨年 20 日)調査で無摘心の「あかね」(小・赤) で 58.7cm、葉数 31 枚(昨年 81cm)と生育は昨年より悪く、草丈も低い。その他の品種についても概ね昨年より生育が悪く草丈も低い(図 1)。

生育遅延の原因は 4 月 6 半旬の低温によると思われ、一部の品種は生育遅延のまま感温性が上がり短いまま開花する懸念がある。これらのことから、「あかね」は 6 月上中旬、エスレル処理もので 6 月中下旬(昨年 5 月下旬)からの出荷が予想される。

9 月咲きギクの定植は、5 月下旬に行われた。10 月咲きギクは挿し芽が 5 月中下旬に行われた。

病害虫では、ナモグリバエの発生がほとんどみられず、微発生。カスミカメムシ類の被害は 5 月中旬からみられ、「織姫」では多発生、明確な品種間差がみられる。キクスイカミキリは例年より遅く、5 月中旬がピークであった。「釣船」、「精かのか」、「白霧」に被害が多かった(大野市富田、阪谷)。

白さび病は大野市の一部で微発生で、初発が 5 月 11 日。黒斑病は全域で見られる。ハマキガの被害が散見される(上庄、下庄、富田)。

表1　大野市の半旬別平均気温

月	平均気温(℃)			
	日平均	昨年比	最低平均	昨年比
4月1半旬	8.3	△0.1	1.0	△0.4
4月2半旬	13.5	**0.0**	9.6	**1.2**
4月3半旬	10.9	△2.0	4.8	△1.6
4月4半旬	12.7	**1.0**	6.4	**0.3**
4月5半旬	13.3	**0.1**	7.1	**2**
4月6半旬	13.4	△1.5	6.9	△3.2
5月1半旬	16.7	**2.6**	11.0	**2.5**
5月2半旬	16.3	△1.6	11.7	△0.4
5月3半旬	17.6	**1.4**	13.8	**2.4**

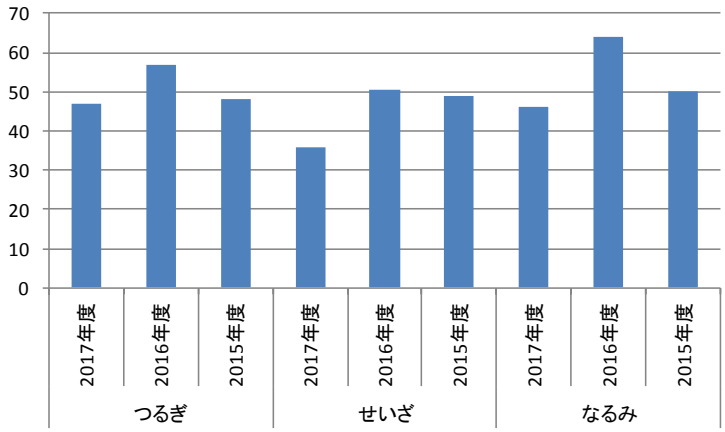

図１　6 月咲ギクの草丈の年次間差

福井市東郷の 6 月咲き品種の「春風」(小・黄)、清風（小。赤）の収穫間近。草丈 62cm、蕾径 3～7mm。7 月咲きの定植が 4 月下旬に行われた。早期開花対策として、本年はエスレル処理を 5 月 16 日に散布した。

5 月中旬に摘心を行った「小鈴」の草丈は 1cm、「翁丸」が 0.5cm であった。大土呂の盆ギクの定植は 4 月に行われた「小紫」11cm(昨年 8cm)、「玉手箱」9cm(7cm)、「小鈴」16cm(10cm)、恋心 21cm(13cm)であった。

病害虫ではアブラムシ類、ハマキガ、キクスイカミキリが局所的に発生、白さび病、黒さび病が多発生。

写真１　あわら市の春植え状況(5/11)

あわら市ハウス栽培の「さきかぜ」、「川風」、「春風」等の秋植え夏ギクは 65～75cm(5 月 11 日調査)。病害虫では褐斑病、白さび病がみられる。昨年は 5 月上旬から開花していたが、本年は遅い。春植えは「小鈴」「めぐみ」等の夏秋ギク定植は 5 月中旬まで行われていた(写真 1)。

越前市では、5 月 17 日調査(昨年 15 日)で 8 月咲きの「はじめ」「恋心」「小鈴」は定植が 4 月下旬に行われた。

丹生の春植え8月咲きギクでは、5月17日調査で「小鈴」は9.5cm、「シューペガサス」6cm、「やよい」12cm、「花絵」6cmであった。「恋心」、「秀いこい」は14～16cmとやや大きい。

9月咲きギクは5月8日(昨年15日)から定植を開始した。

二州の4月中下旬植えの8月咲きギクは、5月16日調査で、草丈は「くれない」が5.4㎝(昨年6.6㎝)、「水鳥」が3.3cm(昨年6.0cm)、「翁丸」が5.3cm(昨年7.0cm)とやや生育が遅い。ハモグリバエ類、白さび病の発生が認められた(昨年5月20日調査)。

若狭の露地の暮れ植え夏小ギクの草丈は(5月16日調査、昨年は5月17日調査)、「夏の風」草丈52.6cm(昨年47.0cm)、「はなふさ」62.6cm(昨年76.0cm)、「はじめ」72.6㎝(昨年77.2cm)、で、草丈のばらつき大きい。芽立ち数は「夏の風」、「はなふさ」が30本／m前後、「はじめ」14～21本／m。「とび丸」は芽立が悪かった。

春植え盆咲きは4月17日(昨年13日)より定植開始。4月29、30日にピンチが行われた。「くれない」が草丈6.2cm(昨年5.0cm)、「翁丸」が9.8cm(11.3cm)、「しらかば」が9.6cm(7.8cm)と昨年並みである(5月16日調査、昨年は5月17日調査)。

9月咲き作型は5月16日に定植された。

2　ユリ

奥越のシンテッポウユリ「オーガスタ」の生育は、4月下旬定植で、葉長8cm、葉数3～5枚である(5月8日調査)。中芯球の草丈大野で11cm(18cm)、和泉で22cm、葉枯病が微発生である。

春江の3月10日定植の「ブラックアウト」(5/11調査)が草丈82cm(74cm)、蕾数5～6輪、3月17日定植の「シベリア」が草丈58cm、葉数89枚。9月17日定植の「アイライナー」は74cm、82枚、3輪前後。

あわらのシンテッポウユリ「雷山2号」は4月下旬に定植した。苗質はやや徒長気味であった。ハウスにも同時期定植した。

3　スイセン

葉の枯れ上がりは、平年よりやや早い。促成栽培用球根の掘り上げが昨年同様5月20日頃から開始された。

4　トルコギキョウ

あわら市では抑制栽培の切り下株の草丈が5月16日時点で30～40cm(昨年30～40㎝)と、昨年並み。一部品種で頂花出蕾はじめ。アザミウマ、炭そ病が少発生。8月出荷作型は「バルカン」系品種を4月下旬に定植した。

大野市では、5月16日調査では4月下旬に定植されたロジーナブルー2対葉である(昨年5月16日調査)。

越前市では5月17日調査(昨年16日)で、6月咲作型(昨年11月15日定植)の「ボャージュグリーン」が草丈64cm、16対葉で出蕾中。昨年度の抑制栽培作型の「バルカンマリン」31cm、10対葉、「ボヤージュグリーン」34cm、11対葉、「てんてまり」27cm、10対葉であった。

4月下旬(20～25日)定植作型で草丈5～6cm、5対葉である。6月咲で葉先枯が中発生。

二州では、5月15日調査で(昨年5月16日調査)、10月下旬定植の「ブルーシルエット」草丈28.4cm、「ピンクシルエット」30.6cm、8月咲きは5月3、4日に定植した。美浜町の盆出し作型は3月28～30日播種苗は5月下旬定植予定。

若狭では5月16日調査で(昨年5月16日調査)、3月上中旬より播種した苗を5月下旬に定植予定。

5　その他

奥越のシャクヤクは 5 月 10 日が目揃え会で、平年並みである（昨年5月上旬)。「茜雲」で86cm、「ポーラフェ」で60～70cm。出荷先は福井、なにわ、金沢市場である。勝山のシャクヤクは平年並み。株立ち 20～50 本。昨年より降雨が多いため花蕾は大きい。

写真 2　出荷適期のシャクヤク

奥越のアリウムギガンチュームは 21 日調査で花茎長 70～80cm(昨年 80 cm)、花の直径は 3cm となっており着色が見られ、出荷は 5 月 20 日以降の見込み(昨年 5 月 16 日調査)。

あわらのヒマワリは、3 月上旬播種、高温管理したものは早期出蕾し、草丈で 40～50cm、一部で奇形花や葉やけが見られる。母の日出荷されていたが、5 月 17 日で終了、開花不良株が若干みられた。3 月中旬頃に発芽株がネズミの食害を受けたほか、一部圃場で発芽不良がみられた。「ビンセントオレンジ」は 2 月中旬播種で 5 月上旬開花し、金沢方面に出荷されている。

アスター電照促成作型は、3 月中旬定植、5 月 10 日電照打ち切り、草丈 30～40cm、キンギョソウ「アスリート」シリーズの二度切栽培は 2 番花が 5 月上旬まで出荷された。

写真 3　アリウム圃場
(5/16)

写真 4　出荷直前の
ヒマワリ(5/11)

写真 4　葉やけしたヒマワリの葉
(5/11)

対策

1　圃場の排水徹底

梅雨期、雨が多く降ると畝溝へ滞水し根腐れをおこし、下葉の枯れ上がりや生長の低下などにより出荷量が低下するので、次の対策を行う。

1）畝溝の排水、水の通りを良くするため、溝さらえや除草を行う。

2）畝溝と直角に交わる集水溝を畝の両側（できれば圃場周囲）に必ず設け、排水溝に落とす。すでに設置してある場合は清掃や除草

を行う。

３）排水溝が高く排水しにくい場合は、雨の時に強制排水を行うため、排水溝の端に集水桝を設置し、ここからポンプで強制排水を行う。

写真５　排水不良圃場。入梅前に対策を行う

４）7 月咲の暮れ植えギクの場合、滞水が続くと根の活性が低下するので、通路や肩の土を削り、地際に土寄せする。この作業により新根発生が促されるため、生育が向上する。

５）過湿気味の圃場で栽培された花弁は日持ちが悪くなりがちであり、キクではいちょう病の発生につながるため、極力、上記の対策を励行する。

２　秋植え夏秋ギクの管理

１）花芽分化後の乾燥は、花弁の伸びが悪く小輪となるため、中輪品種では乾燥させないように注意する。

２）花芽分化後（開花の 40 日前）に、止め肥として 10ａ当たり窒素成分で５kg 程度を、畝の肩部分に施用し、肥料の分解と上根の発根促進のため、土寄せを必ず行う。特に高温期はガス害の懸念もあるため、速やかに土寄せする。

３）止め肥施用後、降雨が多い年は生育後半に肥料が切れる。葉色が落ちた場合は OKF-1 、ハイポネックス等の 500 ～1000 倍で葉面散布をするが、白さび病や褐斑病がみられる場合は施さない。

４）中輪品種では発蕾始めに花首の伸長を抑制するために施設栽培(雨よけ栽培)でビーナイン水溶剤 80 を 10a 当たり 500～5000 倍液 50～150 ﾘｯﾄﾙを茎葉散布する。伸びやすい品種は 1000 倍程度で茎葉散布を行い、確実に効かせる。

３　梅雨期の病害虫防除

１）キク白さび病

気温が25℃以下の湿潤な時期に発生する。草丈50～60cmまではジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブルなどで１週間に１回の予防散布をする。散布時期は雨前が基本であるが、発病が多い場合は、雨の止み間に、チルト乳剤25、アンビルフロアブル、マネージ乳剤や、ストロビルリン系（ストロビーフロアブル、これらは品種によって薬害の恐れがあるので他剤の混用を行わず、展着剤も加用しない）の治療剤を散布するが、同一系統の連用による耐性菌の出現に注意する。ハチハチ乳剤も白さび病に登録がある。

２）キクのアザミウマ類

苗を新たに導入した場合は特に注意して防除する。キクを加害するアザミウマ類はミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマなどの各種があるので、種を確認した上で効果や抵抗性を考慮して薬剤を選定する。特に圃場での切り残し花が発生源となるので早期に除去する。

ミカンキイロアザミウマはキクのえそ病(ＴＳＷＶ)を媒介するので特に発生に注意する。

３）キクのマメハモグリバエ

5 月中下旬から優占種がナモグリバエからマメハモグリバエに変わる場合が多い。葉に対する食い込みが多くなると枯れ上がりがひどくなるため、初期防除を徹底する。マメハモグリバエは幼虫が黄色で、幼虫はさなぎになる前に葉から落下し地中やマルチ上でさなぎとなる。５～７月に発生が多い。発生予察は黄色粘着シートで可能である。

４）ユリ葉枯病（ボトリチス菌）

花芽分化期以降、葉枯病に感染しやすく、圃場排水が悪い条件では特に発生が多くなるので防除を徹底する。雨よけ栽培を行うと発生は少なくなる。露地栽培では出荷の30～40日前、施設で50日前までは、セイビアフロアブルやダコニール1000などの保護殺菌剤を、１週間に１回散布する。発病を認めたら、発病初期にアフェットフロアブル、ポリオキシンAL水溶剤等の治療剤を散布する。展着剤では、保護殺菌剤には展着剤なしで散布するが、施設栽培では汚れ軽減のため界面活性剤系の展着剤を用いる。

4　促成スイセンの花芽分化促進処理

1）高温処理開始までに球根の表皮が親指の腹で簡単にむけるくらいに十分球根を乾燥させる。

2）高温処理は２週間行う。

3）くん煙処理は高温処理後にモミガラを１日３時間の割合で３日間燃やして行う。

4）処理後は植え付けの７月下旬まで、風通しのよい納屋や車庫などで保管する。

5）腐敗した球根は取り除き、7月末日ぐらいをめどに定植する。

5　トルコギキョウの葉先枯れ症

1）トルコギキョウの葉先枯れ症は、極端な水分ストレスにより、カルシウム欠乏となり、生育中期に上位葉の葉先が褐変や萎縮し、ひどい場合には心止まりになる。組織中にカルシウムが少ない品種は出やすく、障害を受けやすい傾向にある。

2）昼温が高いほど発生しやすくなるので、ハウス内の換気に努める。ハウス内の空気が動いている場合は発生が少ないとされるため、内気扇も有効である。

写真６　カルシウム欠乏による葉先枯れ症

3）発生しやすい品種については、花芽分化の時期を中心にカルプラス等を数回、葉面散布する（定植約１カ月後から出蕾期までの間、週１回散布するとよい）。ただし、灰色かび病、炭そ病が発生した圃場では施さない。

6　梅雨期の切り花出荷

梅雨時期に出荷する場合、出荷箱内での花や葉から、ムレにより灰色かび病等による荷いたみが生じやすいので次のことに注意する。

1）収穫前にハウスの換気を十分に行う。

2）露地栽培の切り花を、降雨時に収穫した場合は、茎の下を持って振り、花弁の間や葉にたまった水を極力取り除く。

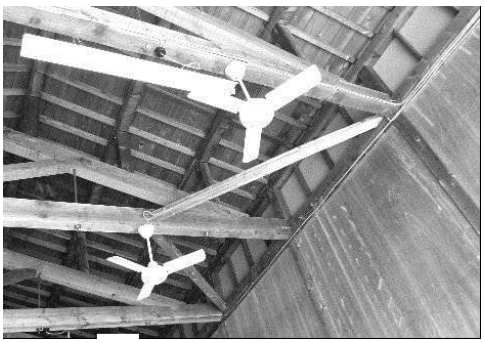

写真　7 天井設置の撹拌扇

3）収穫後に切り花の基部を水中で切り戻し、水揚げを円滑にする。「水切り」等によってできる、切り下の茎や葉はいけ水に溜まらないようにする。いけ水は頻繁に交換する。

4）収穫後、箱詰めまでに花全体が乾くように風通しをよくする。咲きすぎた花は調整時に除く。エアコンの除湿運転や扇風機などで花をできるだけ乾かす。

5）出荷箱に詰めてからも、出荷間際まで箱をあけておき、花全体をできるだけ乾かす。

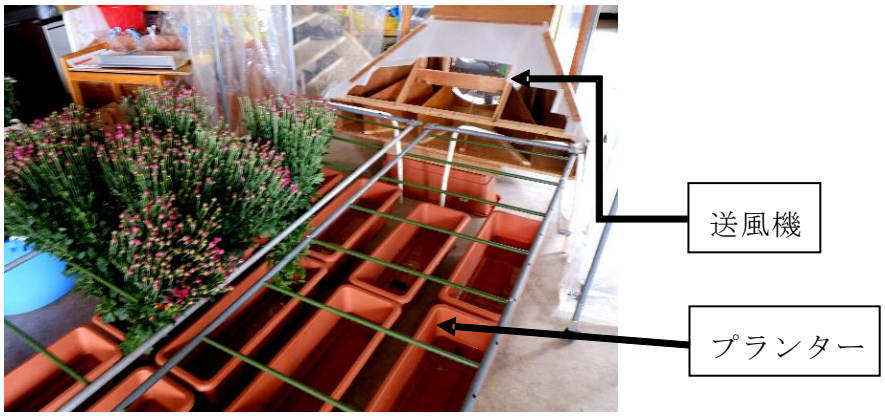

写真　8 自作の水揚げ機材の例
プランターと送風機を組み合せたもの